

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語研の窓 第14号 (2003年1月1日発行)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001947

国語研の窓

14号

平成15年1月1日 第14号 発行 独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集 国立国語研究所普及広報委員会
「国語研の窓」部会

〒115-8620 東京都北区西が丘 3-9-14

電話 03-3900-3111 FAX 03-3906-3530

URL <http://www.kokken.go.jp/>



もくじ

暮らしに生きることば	1
研究室から：「日本語情報資料館」計画	2
国立国語研究所「外来語」委員会・活動報告	4
ことば・社会・世界：中国の日本語研究事情	5
ことば Q&A	6
新刊	6
コラム	7
開催案内・開催記録	7
第13回「ことば」フォーラムのお知らせ	8

暮らしに 生きる ことば

インターネットで言葉を調べる

「フリマ」という言葉をご存知でしょうか？ この言葉は、「フリーマーケット」の略で、1990年代の後半ごろから使われだしたようです。このような新しい言葉は、国語辞典にのっていないことが多いため、意味を知りたいとき、困ってしまいます。

こんなときに役立つのがインターネットの全文検索サイトです。全文検索サイトは、インターネットから、調べたい言葉を含むページを検索してくれるサイトで、googleなどが有名です。「フリマ」を検索してみると、次のような文が使われているページがみつかりました。

- * 近くの公園のフリマに出店した
- * フリーマーケットで買物（フリマ情報）
- * 昨日のお休みに古本フリマに行き、…

「フリマはフリーマーケットの略」というような書き方はされていませんが、いくつかの結果を合わせて考えれば、「フリマ」が「フリーマーケット」

の略であることが推測できます。もちろん、運がよければ、意味を解説しているページを検索できることもあるでしょう。

インターネットで調べることができるのは、新しい言葉だけではなくありません。国語辞典にのっていないような、古い流行語、限られた範囲でしか通用しない語や言い回しなども同様の方法で調べることができます。例えば、「なめ猫」、「雨プロ」、「さらばだ。明智君」などです。機会があれば、検索してみてください。

便利なインターネットの全文検索ですが、利用には注意も必要です。というのも、インターネットは誰でも手軽に情報を公開できるので、誤った情報も多いからです。そこで、ページの著者などを見て、信頼できるページを選んだり、複数のページで同じ情報を得られるか確認することが必要になります。

このように、インターネットは便利な言葉の資料です。しかも、日々成長しています。今後、ますます資料としての重要性が増していくでしょう。

（山口 昌也）

「日本語情報資料館」計画

●「日本語情報資料館」とは

日本語・日本語研究に関する情報を国内外に発信する上で、インターネットはたいへん重要な位置を占めています。「日本語情報資料館」計画は、国立国語研究所が蓄積してきた日本語・日本語研究に関する情報や資料を、インターネットを通じて公開するシステムを作ろうという計画です。

「日本語情報資料館」には、インターネット上で研究所の報告書等を検索・閲覧できる「電子図書館」と、日本語に関する情報や資料を検索・利用できる「電子資料館」が含まれます。また、日本語教育に関する情報提供と日本語教育教材用の素材提供を行う「日本語教育支援ネットワーク・システム」も資料館の一部に位置づけられます（図1参照）。

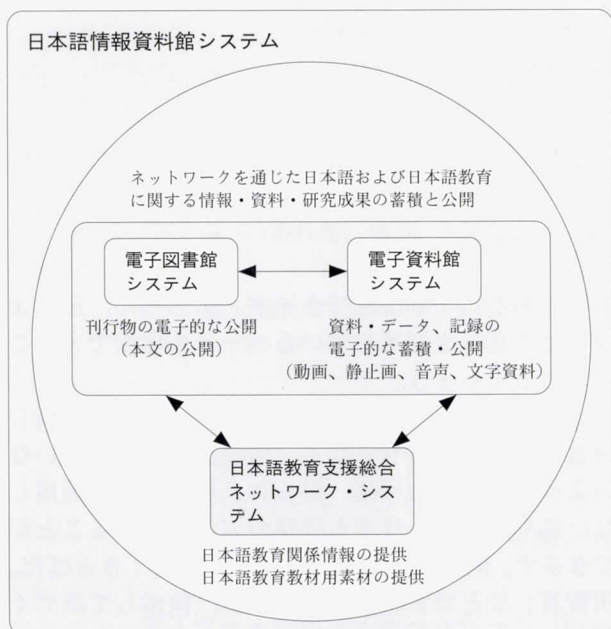


図1 「日本語情報資料館」概念図

国立国語研究所は、1948年の設立以来、日本語に関する数多くの調査研究を行ってきました。研究所には、その際に作成された資料が数多く蓄積されており、日本語に関する重要な基礎資料となっています。また、「日本語に関してどのような研究が行われているのか」、「社会では日本語に関してどのようなことが起きているのか」という情報も、継続的に

収集・蓄積しています。

しかし、資料というものは、放っておくと、時間の経過とともに劣化したり、散逸したりすることが避けられません。蓄積された情報を、知的共有財産として将来に継承し、時代を超えて研究のために有効活用していくためには、継続的かつ組織的な取り組みが不可欠です。「日本語情報資料館」計画は、このような取り組みの一環として行っているもので、

- ①国立国語研究所が保有する情報・資料への総合的な検索手段の提供
- ②情報・資料の電子化による資料の保存・利用の高度化
- ③インターネットを利用した国内外への公開などのことを目標にしています。

以下では、「日本語情報資料館」の中の「電子図書館」と「電子資料館」について、簡単にご紹介します。

●電子図書館 ― 研究報告書等の電子化と公開 ―

「電子図書館」では、国立国語研究所がこれまでに刊行してきた研究報告書や資料集を電子化したものを「電子化報告書」として公開します。現在、刊行順に電子化を行い、順次インターネット上で公開しています（<http://www.kokken.go.jp/siryokan> 次ページの図2参照）。

国語研究所の研究報告書や資料集は、日本語に関する基礎的資料であり、また、日本語に関する先駆的な研究として重要な役割を担ったものも数多くあります。しかし、現在では入手が難しいものも少なくありません。また、海外では一層の困難が予想されます。研究報告集や資料集を「電子化報告書」という形で公開することは、国内外の研究者を含む多くの人々がこれらの基礎資料に接することを容易にし、広く社会全体で研究成果を共有することを可能にしてくれます。

「電子図書館」は、国立国語研究所図書館の図書館情報システムと連動しており、図書館の目録検索システム（<http://libsvr5.kokken.go.jp/index-j.html>）を経由しても利用することができます。

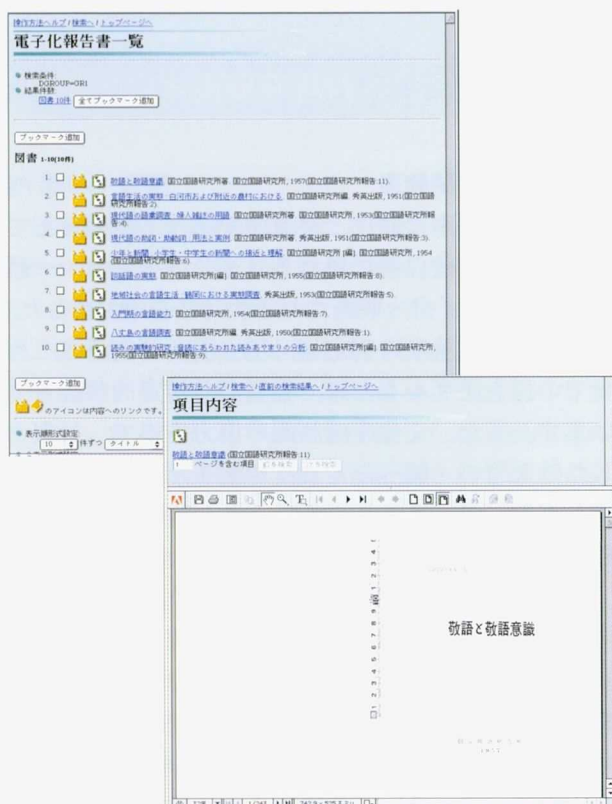


図2 「電子図書館」 検索画面
と電子化報告書

●電子資料館 一言語資料の電子化と公開

「電子資料館」では、電子化した言語資料をインターネット上で公開します。公開される資料には、文字資料のほか、音声資料や画像資料も含まれます。

資料の電子化には、「資料劣化への対策」としての側面と「電子化による新たな利用への展開」という二つの側面があります。例えば、国語研究所には、方言談話資料、24時間調査の録音資料、言語生活の録音資料、その他各種の音声資料が保存されています。これらの資料を電子化することは、資料の劣化の防止に役立つだけでなく、原資料を新たな視点から分析し直したり、新たな研究を展開させたりするのに役立ちます。

また、科学研究費の補助を受けて「日本言語地図データベース」の作成を進めています。『日本言語地図』は、全国各地の方言において「どこにどのような語形や発音が現れるか」を地図上に表示したものです。日本全国の方言の分布を一望できる貴重な資料で、国語研究所の代表的な研究成果の一つです。調査は1957年から1965年にかけて行われ、調査地点数は2400、調査項目数は285に及びます。

この『日本言語地図』の原資料は、調査者によっ

て記入された約50万枚のカードで、国語研究所にはその一式が保存されています（図3参照）。現在、このカードを画像データ化するとともに、地図化された各地点の語形等に関する情報も、文字情報として電子化を進めています（平成16年度の公開を目指しています）。

このデータベース化が完了すれば、原資料であるカードの情報は全て画像として電子化され、文字情報と合わせることによって、検索や統計的な処理に耐えるデータが揃うことになります。また、原資料の保存と活用、ネットワークを利用した資料の共有への道が開かれることになります。

「日本語情報資料館」では、ここで述べた以外にも、索引情報や目録情報をはじめ、国語研究所で保存されている資料に関する情報も作成しています。

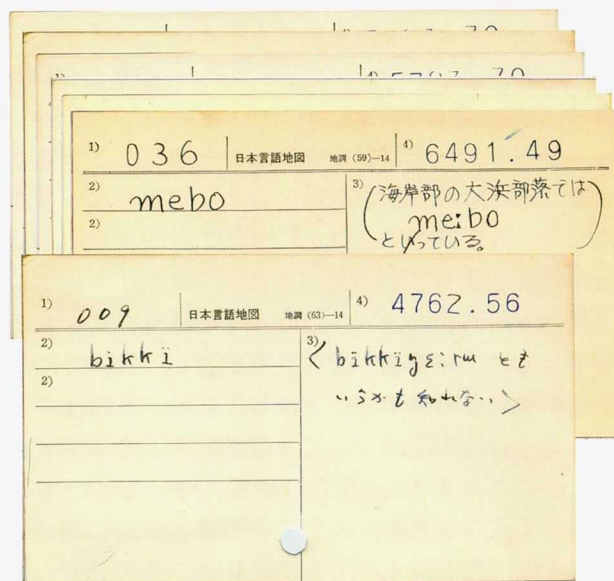


図3 『日本言語地図』の原資料

「日本語情報資料館」計画は、平成13年度に開始し、現在部分的な公開を進めながら、平成17年度中に全体システムを一通り完成させることを目標としています。「日本語情報資料館」に対するご意見やご要望等がございましたら、siryokan@kokken.go.jp までお寄せください。個々のご意見にはお答えできませんが、「日本語情報資料館」をよりよいものにするために活用させていただきます。

（熊谷 康雄・森本 祥子）

●「外来語」の問題点

日本語でコミュニケーションを行っている私たちにとって、なじみのない、分かりにくい外来語が日常的に身近を飛び交っていることは、とても困った問題です。特に、官公庁の公的な文書や多数の人を対象とする新聞・放送などに、このような外来語が次々に現れるとき、そこには放っておけないさまざまな問題が発生しているように思われます。

冷静に考えれば、外来語には、これまで日本になかった事物や考え方などを表現する言葉として、日本語をより豊かにするという優れた面もあります。しかし、その一方で、むやみに多用すると円滑なコミュニケーションの障害となり、私たちの日常生活をおびやかすような面も出てくるというわけです。

●「外来語」委員会とは

そもそも、どんな言葉を使うのが適切かということは、その時々や場面によって変わるべきものです。外来語を使うことについても、全く同じことが言えるはずです。

国立国語研究所では、このような認識に立って、昨年8月に「外来語」委員会を設置し、具体的に問題点の検討を開始することになりました。目的は、分かりにくい外来語について言葉遣いを工夫し提案することにあります。（設立の趣旨については、本誌13号に「設立趣意書」の全文を掲載しました。）

さらに、欲を言えば、この委員会の提案がきっかけとなって、より多くの人々がそれぞれの立場で、私たちの大切な日本語について考えていく機会が生まれることになればとも考えました。

●委員会の活動

委員会の構成は、研究所の外部からの委員16名と内部の委員4名の計20名から成ります。外部委員の方々は、どなたも外来語をはじめ言葉の問題に、それぞれの立場から深い関心をもっておられる方々ばかりです。

委員会では、まず、国の省庁の行政白書を、その後は新聞や雑誌など公共性の高いものを対象に、一般に分かりにくい外来語が使われていないか、使われていれば、それに換えるべき分かりやすい言葉や表現にはどんなものがあるかを検討します。目指す

ところは、個々の外来語に対する考え方やその言い換え例を含めた、緩やかな目安・よりどころを具体的に提案することにあります。

●第1回の中間発表

第1回の提案に向け、検討対象語は、原則として最新の国の行政白書に現れる外来語の中から、一般への定着が不十分と判断される約70語を選びました。語の選定と定着度の判定は、国立国語研究所のこれまでの調査研究をもとに、委員会が暫定的に行っています。また、文化庁国語課の協力を得て、対象とした外来語の一般への定着度を知るために、世論調査も実施しています。これにより、検討結果の妥当性をより高めることができます。

さて、委員会の設置から4か月余り、昨年末には一通りの検討を終えて、その結果を一度世の中に示し広く御意見等をいただくために、中間発表を行いました。内容は、研究所のホームページ（<http://www.kokken.go.jp/>）上に全文を掲載して、メール、書簡、ファクシミリ等によって御意見をいただけるようになっていきます。（提案の一例として「インフォームド・コンセント」を下に引きます。）

インフォームド・コンセント

意味 治療の前に、医師は、病状や治療の内容につき十分に説明を行い、患者は、それを納得して同意すること。

言い換え語例 納得診療。

説明付与例 インフォームド・コンセント（医師の十分な説明と患者の同意）。インフォームド・コンセント（医療行為をめぐる十分な説明と患者の同意）。

用例 医療の受益者である患者の人権が尊重されねばならず自己決定のためのインフォームド・コンセントの重要性が認められている。（白書）

注記 原語の概念を過不足なく言い換えられる語はないが、患者の視点に立って言い換えることが望ましい場合は、「納得診療」が分かりやすい。概念の正確さを期す場合は、「インフォームド・コンセント」の語を、説明を付与して用いる。

この第1回提案の最終発表は、今年の4月に行う予定です。中間発表に対していただいた御意見と世論調査の結果を、適切に盛り込んだ内容にしたいと考えています。

（相澤 正夫）



●「若い」学問

日本語の研究は日本国内だけでなく、世界各地で行われています。日本語教育が盛んなお隣の中国でも、日本語の研究は活発に行われています。最近では、書店でも一般の日本語教材や辞書とともに、日本語に関する学術研究書の類が並ぶようになってきました。また、日本で学位を取得した若手研究者による本格的な研究書も、次々と出版されています。『日語学習与研究』（日本語の学習と研究）などの日本語教育・日本語研究関係の雑誌も定期的に刊行されています。

中国で日本語についての本格的な研究がなされるようになったのは、1980年代以降のことです。日本の中国語研究が長い歴史と伝統を有するのに比べれば、中国の日本語研究は始まったばかりと言ってもいいでしょう。

しかし、歴史が浅い分、若い人材が指導的立場にたって活躍する場面も多く、たとえば、国立国語研究所と学術交流協定を結んでいる「北京日本学研究中心」の主任として活躍しておられる徐一平氏は、46歳という若さです。中国の各地域で中核的な役割を担っている方々も、その多くは徐一平氏と同じ世代に属します。

若いエネルギーによって新しい伝統が着々と形づくられつつある、それが中国における日本語研究の現状といえるでしょう。

●中国の日本語研究の特色

中国における日本語研究でよく取り上げられるテーマは「文法」と「語彙」です。これは、第一に日本語教育において必要な研究であること、第二に日本と中国の間に長い語彙の交流の歴史があるという二つの理由によるものと思われます。コンピュータを用いた研究も普及しつつあります。

中国の日本語研究の特色としては、「日本人研究者との交流が非常に活発である」ということがあげられます。特に最近では、全国各地の大学や研究機関が競って特色あるシンポジウムやフォーラムを企画し、日本国内からも多くの研究者が参加しています。日本からの参加者のかなりの部分が自費参加であることを考えると、いかに中国人研究者から熱心な呼びかけがあるか、そして、いかに日本国内の研究者

が中国の日本語研究に関心を寄せているかということがわかります。

このような個人レベルの交流に加え、国レベルの交流があることも見逃せません。1979年の日中文化交流協定にもとづき北京に設置された「在中華人民共和国日本語研修センター」（通称「太平学校」、1980年～1985年）には、数多くの著名な研究者が講師として赴任し、中国における日本語教育・日本語研究の基礎を確固たるものにしました。同センターの修了生は、中国の日本語教育を支える中核的な役割を担うとともに、社会のさまざまな分野で活躍しています。

また、その後を受けて設置された「北京日本学研究中心」（1986年～現在）は、日本の国際交流基金と、中国教育部（日本の文部科学省にあたる）の共同事業として、大学院レベルの教育を行っています。

●今後の展望

中国の日本語教育のレベルは高く、日本人研究者も参加するようなシンポジウムでは、日本語を公用語として用いることがごくあたりまえのこととして行われています。また、日本語の力がしっかりしているので、日本人研究者も安心して専門分野について議論することができます。日本語に対する感覚もたいへん鋭く、私自身、中国の研究者との議論を通じて教えられたことが少なくありません。その意味で、中国の日本語研究は、大きな潜在能力を秘めているといえるでしょう。

ただ、先に述べたように、中国における日本語研究の歴史はまだ浅く、中国国内の言語学研究においても、日本語の研究は必ずしも重要なものとして認知されていません。まずは、広く中国国内の言語研究者に対して、日本語研究のおもしろさや重要性をアピールし、日本語研究を中国における言語研究の一分野としてしっかりと定着させることが目標になるでしょう。

また、そのためには、日本人研究者の側でも、日本国内の研究をそのまま輸出するのではなく、中国人研究者との交流を通じて、自らの研究の意義を相対的な視点から見つめ直すという姿勢が必要でしょう。

中国の日本語研究の発展は、同時に日本国内の日本語研究の国際化でもあるのです。

（井上 優）

ことばQ&A

質問 中国語に入った日本語があると聞いたことがあります。いったいどのような語が中国語にとりいれられたのでしょうか。

回答 日本語には、中国語から入ってきた語が多くあります。それらは漢語とよばれ、日本語の語彙のなかで重要な位置を占めています。しかしその反対に中国語に入った日本語もあります。この中国語における日本語の受容で、とくに注目されるのは19世紀末から20世紀初めにかけての翻訳語の受容です。この時期中国語に入っていた翻訳語には、「社会」（英 society の訳語）や「哲学」（英 philosophy の訳語）などがあります。これらは、西洋の学問を移入するために、明治期に日本で作られた翻訳語です。

明治期に作られた翻訳語がどのようにして中国語に入っていたのか、その経緯を見てゆきましょう。

19世紀末中国は日清戦争での敗戦により、近代化の必要性を痛感するとともに、日本に強い関心を持つようになりました。これは、日本が中国よりも先に西洋文明を吸収し、近代化に成功していたためです。そして中国は1896年から留学生を日本に派遣するようになりました。

この留学生たちは、西洋の学問に関する書物を日本語から中国語に翻訳して本国へ送りました。この時、新たに翻訳語を作らずに日本の翻訳語をそのま

ま使うこともありました。こうして19世紀末から20世紀初めにかけて、中国語は明治期の日本で作られた翻訳語を受容してゆくことになったのです。

中国語が日本の翻訳語をそのまま受容できたのは、日本で西洋の事物を翻訳するときに漢語を使ったからです。明治期の知識人たちにとって、中国の古典を学ぶことは大切な教養でした。そのため彼らは、西洋の事物を翻訳するときにも、中国の古典にある漢語を翻訳語として借りたり、また新たに漢語を作ったりしたのです。

中国語に入り定着した日本の翻訳語には、「社会」「哲学」以外に「革命」や、「音符」「音域」といった音楽用語もあります。このうち「社会」「革命」は、中国の古典にある語を日本で翻訳語に使ったものです。したがって、中国語から見れば、新しい語の受容ではなく、日本において加えられた新しい意味の受容というべきものです。

さて、最近外来語の問題がよく話題になります。日本語と外国語との関係といったばあい、日本語がどのような語を外国語から受け入れたのかということが注目されます。しかし日本語が外国語を受けいれるばかりでなく、日本語が外国語に受けいれることもあるのです。今後は、日本語と外国語との関係を、「語彙の交流」という視点からみてゆくことも必要でしょう。（小椋 秀樹）

新 刊

1 『国語年鑑2002年版』

2002年12月／大日本図書／A5 判横組み576ページ／本体7600円

2 全国方言談話データベース

『日本のふるさとことば集成—第6巻 東京・神奈川—』（国立国語研究所資料集13-6）

2002年12月／国書刊行会／冊子（A5 判横組み218ページ）、CD、CD-ROM／本体6800円

昨年9月28日（土）・29日（日）の2日間、北京外国語大学において、5ページでも紹介した北京日本学研究中心主催の国際シンポジウム「進化する日本研究」が開催され、日本語、日本文学、日本社会、日本文化、日本語教育の研究者が多数参加しました。国語研究所からも二人の研究員が参加し、以下の研究発表をおこないました。井上優「方言の対照研究」（言語分科会1：文法研究の新展開）、前川喜久雄「話し言葉コーパスの利用可能性」（言語分科会2：コーパス言語学の新展開）

また、10月には、所長と研究部門長が北京日本学研究中心を訪問し、以下の講演をおこないました。甲斐睦朗「最近の日本語関係図書における日本語能力観、日本語観を考える」、杉戸清樹「日本人の言語行動を考える一つの手がかりとして—国語研「ことばビデオ」作品の紹介—」、相澤正夫「音声現象の多様性」

「寒いわねえ」―縮まる言葉の男女差―

「寒い」ということを人に伝えたり共感を求めたりするとき、若者世代は「寒いっすねえ」と言う人が少なくない。中年以降の男性は「寒いすなァ」と言う人がいる。では、中年以降の女性はどう言うだろうか。

日本語は言葉の男女差が明確な言語だ。小説の会話部分を読むだけで性別が判断できる場合も少なくない。どこで分かるかという、ひとつは自分を指す言葉（自称詞）で、もうひとつは文の末尾（文末表現）だ。

自称詞だと、「オレ」とか「ボク」を使うのは大抵男性であり、「アタシ」を使うのは大抵女性だ。

一方、文末表現だと、「(あしたは) 寒いぞ」「寒いぜ」を使うのはおもに男性で、「寒いわよ」「大寒波よ」「大寒波だわよ」を使うのはおもに女性だ。

女性が使う表現を分析すると、①「わ」を付ける、②「だ」を省略する、③「だ」は省略しないが「わ」を付ける、という特徴が抽出される。理屈から言えば、①と②をミックスした「大寒波わよ」があってしかるべきだが、実在しない点はおもしろい。「だ」

を省略せず「大寒波だわよ」とするのが正しい作り方だ。

さて、こうした表現だが、女性であれば皆使っているかという、そうではない。国立国語研究所が東京都在住者約千人を対象に実施した最近の調査によると、女性で①「(雨が) 降るわよ」や②「(あしたは) 雨よ」を使う人は5～6割、③「(あしたは) 雨だわよ」を使う人は2割にすぎない。年齢層別に見ると、40～50代では①②は7～8割、③は2～4割いるが、いずれも若年層になるほど使用者は急減し、20代では①②は2～3割、③は1割にも満たない。

ではどんな言い方をするようになってきたかと言うと、「わ」を付けない「降るよ」や「だ」を省略しない「雨だよ」という言い方だ。これらは従来おもに男性が使っていた表現だが、20～30代では女性も普通に使い、ほとんど男女共通の表現となっている。

その結果、「降るわよ」「雨よ」「雨だわよ」は、40代以上の女性を中心に残る表現となった。文末表現の男女差は、現在急速に縮まりつつあるようだ。

(尾崎 喜光)

(平成14年に共同通信社より全国各紙に配信された記事に若干の修正を加えたものです。)

※このコーナーは国立国語研究所所員が書いた文章を、発行元の許可を得て転載するものです。

開催案内

1 「ことば」フォーラム

第13回「方言地図とは何か」(詳しくは8頁をご覧ください)

2003年1月18日(土) 国立国語研究所

第14回「ビジネスや留学にいきる言葉の力とは？」

2003年3月15日(土) 中目黒GTホール

2 第10回国立国語研究所国際シンポジウム

第3部会「環太平洋地域における日本語の地位」

2003年2月1日(土) 国立国語研究所

問い合わせ先: myoneda@kokken.go.jp

3 平成14年度日本語教育短期研修

第5回「学習の多様性を探る―学習リソースの再検討―」

2003年1月25・26日 九州大学

第6回「地域における日本語学習支援―視聴覚教材利用の可能性―」

2003年3月21～23日 国立国語研究所

問い合わせ先: tanken@kokken.go.jp

開催記録

1 第12回「ことば」フォーラム「新聞の漢字」

(日本新聞協会関西用語懇談会と共催)

2002年10月25日 朝日新聞大阪本社1階ホール

2 平成14年度国立国語研究所公開研究発表会

「表現法の地理的多様性―方言地図で見る表現法の世界―」

2002年12月20日 国立国語研究所

3 平成14年度日本語教育短期研修

第3回「コンピュータによる自由作文の自動評価システム」

2002年12月7・8日 国立国語研究所

第4回「論理的文章作成能力の育成に向けて」

2002年12月21・22日 国立国語研究所

—— 第13回「ことば」フォーラムのお知らせ ——

テーマ：「方言地図の見方・作り方」

日 時：2003年1月18日（土） 14:00～17:00

場 所：国立国語研究所 5階 講堂 ※入場無料，手話通訳あり

内 容：「方言地図」という種類の地図があります。この地図はどんな地図で、どのようにして見るのでしょうか。また、その地図はどのようにして作られるのでしょうか。具体的に地図を見ながら、そして、参加者のみなさんとともに実際に地図を描きながら、方言地図の見方・作り方について解説します。

1. 「方言地図とは何か」 大西拓一郎（国立国語研究所）

方言地図とはどのようなものか、地図にするとどういうことがわかるのかをわかりやすく説明します。

2. 「方言地図の作り方」 三井はるみ（国立国語研究所）

国立国語研究所編『方言文法全国地図』を例に、方言データの集め方から地図の作り方までを、スライドを使って解説します。

3. 「方言地図を作ってみよう」 大西拓一郎（国立国語研究所）

事前にみなさんから次のような形で寄せていただいたデータをもとに、コンピュータを使って方言地図を描いてみます。これによって何が見えてくるかをいっしょに考えてみましょう。

- | | | | | |
|------------------------|------------|-----------|-----------|--------------|
| 1 「行かない」を何と言いますか？ | a. イカナイ | b. イカン | c. イカヘン | d. その他 _____ |
| 2 「(ここは) 静かだ」を何と言いますか？ | a. シズカダ | b. シズカジャ | c. シズカヤ | d. その他 _____ |
| 3 「とうもろこし」のことを何と言いますか？ | a. トーモロコシ | b. モロコシ | c. トーキミ | d. その他 _____ |
| 4 「(あれを) 見ろ」を何と言いますか？ | a. ミロ | b. ミヨ | c. ミレ | d. その他 _____ |
| 5 「読んでしまった」を何と言いますか？ | a. ヨンデシマッタ | b. ヨンジャッタ | c. ヨンデマッタ | d. その他 _____ |

4. 「質問コーナー」

方言地図や方言に関する質問にお答えします。

5. 「言語地図を作ってみよう —— 地図作りデモンストレーション ——」（希望者のみ）

参加者の皆さんといっしょに実際に方言地図を作ってみます。

ポスター・ちらし・ホームページ (<http://www.kokken.go.jp/hogen>) もご覧下さい。

申し込み先：〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14 国立国語研究所

第13回「ことば」フォーラム係

電子メール：forum@kokken.go.jp

問い合わせ先：電話 03-3900-3111（代表）

第14回「ことば」フォーラムは「ビジネスや留学にいきる言葉の力とは？」というテーマで、2003年3月15日（土）に中目黒GTホールでおこなわれる予定です。